

## イギリス地理教育における新聞教材構成論

西 川 京 子

### The Philosophy of Utilizing Newspaper Articles as Teaching Materials in Geography Education in the United Kingdom

Kyoko NISHIKAWA

#### I. は じ め に

学習指導要領の改訂に伴い、新聞を使った教育が始まった。学校教育の現場においては、これまでの先駆的な取り組みが場当たり的に取り入れられ、継続的・系統的な学習を提供しえてはいない。原因は大きく二つ考えられる。一つは、どのような新聞記事を扱えばよいのかという教材の選出基準とその目標原理が解明されていないことにある。もう一つは、新聞に関して何をどのように学ばよいかという学習方法原理が解明されていないことにある。本研究は、小学校社会科における新聞学習方法論構築の基礎研究として、前者の課題に焦点をあてる。

新聞教材の構成論の解明にあたっては、イギリス地理教科書『Jigsaw Pieces』<sup>1)</sup>（以下 JP と略記）を取りあげる。イギリスは世界最古の日刊新聞を有し、1880年代から子ども向け新聞を発行してきた国である。地理教科書には記事が多く用いられ、学習内容・学習材・学習問題・学習活動・学習形態・資料が明記され、新聞教材構成論が抽出しやすい。JP が発行された1990年代は、地理教育を通してどのようなシティズンシップをどのように育成していくかについて多くの取り組みがなされた時代である。中でも JP は、次の認識の育成に成功し、多くの記事を教材として活用している点に特徴がある<sup>2)</sup>。

- ① 多様な要素が複雑に絡み合い変化する地球社会を広い視野から捉える見方・考え方（有機体論的世界観）
- ② 地球社会の一員としての自分の位置づけ（自己中心性等の解消に必要な社会的自己認識）
- ③ 大自然の中ではちっぽけな人間という認識（環境問題を生む人間中心主義からの脱却）

分析の視点は次の3点である。

- 
- 1) キーステージ3の地理教科書で11歳から12歳を対象としている。  
David Lambert, "Cambridge Geography Project Jigsaw Pieces", Cambridge, 1992
  - 2) 拙稿「グローバルに考えローカルに行動する資質を培う社会科学習方法論—ケンブリッジ地理プロジェクトの単元『端で暮らす』の分析を手がかりに一」全国社会科教育学『社会科研究』第70号, 2009, pp. 41-50.

- i 学習者はどのような記事を使って学ぶのか。(教材構成)
- ii JP は、なぜそのような記事を教材としたのか。(目標原理)
- iii 新聞教材構成論の特質は何か。(示唆)

## Ⅱ. 教 材 構 成

JP は【表 1】に示す 8 つの単元から構成され、どの単元でも記事を教材として活用している。他のメディア（テレビ番組、雑誌記事）を扱う単元 5 と 7 を除くすべての単元で 3～10 件もの記事が用いられ、一単元に多くの記事を扱うという特色がある。記事は基本的に全文を掲載しているが、単元 2 と 4 だけは見出しのみを大量に使っている。

【表 1】JP の単元と記事の数

単元	単 元 名	全 文	抜 粋	見出し
1	暮らしの中の境界線	4		
2	イギリスジグソーパズル	1		3
3	自然的境界線：陸と海	7		
4	ヨーロッパジグソーパズル	3	1	6
5	熱帯世界への旅	1		
6	端で暮らす	3		
7	あなたの世界はどれくらい広い？	1		
8	人々間の境界線	4		
小 計		24	1	9
合 計		34		

(筆者作成)

### 1. 掲載記事の発行年

【表 2】は JP に掲載されている記事の発行年を調べたものである。「不明」とあるのは、発行年が記載されていなかった記事のことである。ただし、これらは、その内容からどれも 1989 年と 1990 年の記事と断定できる。不明の記事をあわせると 34 件中 32 件が、1989 年以降に発行されたことが分かる。JP は 1992 年に出版された教材なので、最新の記事を学習に用いているといえる。そのため、記事が示す事象は学習する際に完結しておらず、現在進行中のものとなっている。

古い発行年の 2 件（1961 年と 1977 年）は、単元 4 で用いられ、ベルリンの壁の建設を伝えている。事象の歴史的経緯や当時の社会的評価を知ることができる。

JP では、過去について調べるために記事を活用するスキルよりも、学習者が生きている今現在の問題や現代社会の状況を知るために活用するスキルの育成を重視しているといえる。

### 2. 掲載記事を発行した新聞名

【表 3】は JP に掲載されている記事の出典先を調べた表である。「不明」とあるのは「ある記事」

【表2】発行年

発行年	件
1961	1
1977	1
1989	8
1990	10
1991	1
不 明	13
合 計	34

(筆者作成)

【表3】新 聞 名

新 聞 名	件
THE INDY	5
EARLY TIMES	5
THE EVENING STANDARD	1
不 明	23
合 計	34

(筆者作成)

と書いてあるか、出典先が無記名の記事である。

『THE INDY』は、既存の新聞の中で最も新しい高級紙で1989年に創刊された。「本紙はそう独立 (Independent) しているのです。あなたはどうか？」という刺激的な広告文と共に登場し、「政治的にどこにも属さない」新聞である点で教材として優れた新聞といえる。2004年には『National Newspaper of the Year』に輝いた。

『EARLY TIMES』は、イギリスで3番目に創刊された子ども向け新聞で、創刊者の Nicky Cox は大英帝国勲章を受賞しており、現在はイギリスのジャーナリストとして有名な Piers Morgan と共に『First News』(7～14歳向け)を発行している。これは子ども向けに作られ、編集者がその世界で高く評価されている点から、教材に適した新聞と言える。

『THE EVENING STANDARD』は、ロンドンの地方紙で夕刊である。地理教科書はどの地域でも活用されるように作られているので地方紙は使用されにくいと考えられる。この記事は単元8で用いられ、経済制裁やスポーツ制裁の廃止により南アフリカ共和国が世界クリケット大会に復帰したことを伝えている。本文には「人々の心にある差別や偏見をイギリス人がどう乗り越えるかに注目が集められている」<sup>3)</sup>とある。地方紙の記事だが、単元8の「人々の間の境界線」というテーマに関わり、ロンドン市民だけではなく、イギリス人全員にとって自分達にかかわりのある現在進行中の問題として理解するのに役立っている。このように、JP は、政治的に左右されないより公正かつ、学習者の立場にたった記事を掲載しているといえる。

### 3. 学習対象の空間的規模

【表4】は、JP の記事に記述されている空間の規模や、記事を活用した学習活動で学習者が意識する空間の規模を調べたものである。表の「地域集団」とは、国家内部の行政区にとらわれず、地形や文化によって必然的に密接につながりあって形成された地理的・文化的コミュニティの人々を示す。「公人」は記事に関する事象に公的に影響を与え合う人物を示す。「広域地域」は、国家内部の複数の行政区をまたがった空間やそこに暮らす人々を示す。「広域圏」は複数の国家をまたがる空間や人々を示す。「広域圏」の欄が空欄の場合はその空間を示す適当な言葉が見つから

3) Ibid. p. 30.

【表4】学習対象とする空間の規模

単元	記事タイトル	広域地域＝地域をまたがる空間 広域圏＝国家をまたがる空間
単元1	1 (不正と) 戦っている！	個人 : モーホー族の男・警察官 地域集団 : 7,000人の二つのインディアン集落 Kanasatake とモーホー族の住民・地元警察隊2,000人 公人 : 地元市長 州・都市 : モントリオール近郊 広域地域 : カナダ系モーホー族 国家 : カナダ 広域圏 : 北米
	児童が集める記事	個人 : 自分・白人アメリカ人 地域集団 : 入植者・先住民・？その他入植者に追われた人々 (学習者が調べた事例に応じて) 公人 : ？ (学習者が調べた事例に応じて) 州・都市 : ？ (学習者が調べた事例に応じて) 広域地域 : ？ (学習者が調べた事例に応じて) 国家 : カナダ・オーストラリア・ニュージーランド・？ (学習者が調べた事例に応じて) 広域圏 : 北米・ヨーロッパ 世界
	2 エチオピア反政府組織がようやく交渉に	個人 : 兵士・住民・渡航者・反政府組織のリーダー 地域集団 : 反政府組織 公人 : メングス大統領 州・都市 : ローマ 広域地域 : エリトリア・ティグリ 国家 : エチオピア・イタリア・イギリス・ソマリア 広域圏 : 東アフリカ・ヨーロッパ・アフリカ大陸
	3 深層：バルトの分裂	個人 : 地域集団 : 海外移民の人々・その家族・？対立中の国境に関連する人々 (学習者が調べた事例に応じて) 公人 : ゴルバチョフ書記長・？ (学習者が調べた事例に応じて) 州・都市 : ？ (学習者が調べた事例に応じて) 広域地域 : ？ (学習者が調べた事例に応じて) 国家 : ソビエト連邦・アゼルバイジャン・ベラルーシ・リトアニア・アメリカ・オーストラリア・エストニア・ラトビア・ポーランド・ドイツ・？ (学習者が調べた事例に応じて) 広域圏 : 南米・西ヨーロッパ・バルト海沿岸・？ (学習者が調べた事例に応じて) 世界
	4 深層：今なお引き裂かれた海	個人 : 自分 地域集団 : イギリス系住民・？対立中の国境に関連する人々 (学習者が調べた事例に応じて) 公人 : ？ (学習者が調べた事例に応じて) 州・都市 : 香港・？ (学習者が調べた事例に応じて) 広域地域 : フォークランド・？ (学習者が調べた事例に応じて) 国家 : イギリス・アルゼンチン・中国・？ (学習者が調べた事例に応じて) 広域圏 : 南米・西ヨーロッパ・EEC・？ (学習者が調べた事例に応じて) 世界
単元2	5「良い生活」を求めて南に移動 6 分裂した国一格差の拡	個人 : マーガレットエバンズ (受け入れ側)・サラ (移住者)・ロンドン人・自分 地域集団 : 南へ移動する人々・受け入れ側の人々・北部の人々

	<p>大は許されるのか？ 7 南北危機 8 良い生活から締め出される ロンドン人</p>	<p>公人 : 州・都市 : イギリスの9地域 (ハンプシャー・ヨークシャー等)・103の都市 (ロンドンなど) 広域地域 : 南部・北部 国家 : イギリス 広域圏 :</p>
単元3	<p>9 過去50年間で最悪！ 10 温室効果責められない 11 海洋防御施設失敗！ 12 新防御施設が原因？ 13 もっと先の災害に直面する街？ 14 現金を 15 二度と離れない 16 「お金の無駄遣い」</p>	<p>個人 : トニーバロウ (ロス住人)・クレイキートン教授・環境技師 地域集団 : ボランティア環境健康連盟・市民税を払う人々 公人 : ロンドン当局・Towny 市長・スポークスマン 州・都市 : Towny 広域地域 : ノーフォーク州・北ウェールズ 国家 : イギリス・イギリス政府 広域圏 : 世界</p>
単元4	<p>17 誰もが望んだ… 18 東ドイツ人が西へ 19 陰気で恐ろしい壁 20 警備隊が逃亡者に火 21 壁をすこしずつつける 22 ベルリンの壁開かれる 23 ショッピングセンター建設</p>	<p>個人 : 16歳の Rudiger とアレックス 地域集団 : 何百万もの人々・西ドイツ住民・東ドイツ住民 公人 : 州・都市 : マッケンハイム・ボン校外・ベルリン 広域地域 : 国家 : 東ドイツ政府・西ドイツ政府・EC 広域圏 :</p>
	<p>24 25 壁が崩壊し、東から人々が</p>	<p>個人 : Pisztray (ショッピングセンター経営者) 地域集団 : ハンガリー住民・オーストリア住民 公人 : 州・都市 : ソブロン・ブダペスト・ビエナ 広域地域 : 国家 : ハンガリー・オーストリア 広域圏 : EC・国境地帯 (ハンガリーとオーストリア)・ソブロンの経済圏</p>
単元5	26	<p>個人 : デビ (アマゾン先住民のリーダー) 地域集団 : 公人 : 州・都市 : 広域地域 : 国家 : アメリカ 広域圏 : 環境保護団体 (グリーンピース・地球の友)・南米の環境保護団体・アマゾン 世界</p>
単元6	27	<p>個人 : リズ (地震研究者)・消防隊員・危機管理委員、都市財務局員、消防士、医療関係者、地理学者、建築技師・自分 地域集団 : サンフランシスコ住民・北カリフォルニア州の人々 公人 : 州・都市 : 北カリフォルニア州 広域地域 : アメリカ地理学会やカリフォルニア建築技師会、サンフランシスコ厚生省、サンフランシスコ消防局、銀行連盟、市議会 国家 : アメリカ 広域圏 : 世界</p>
	28. 29	<p>個人 : 警察官・エバディー家 地域集団 : イラン住民 公人 : 州・都市 : 北カリフォルニア州 広域地域 : イラン北部 国家 : 80以上の国々</p>

		広域圏 : 世界
単 元 7	30	個人 : 地域集団 : 公人 : イギリス女王・パキスタン大統領 州・都市 : 広域地域 : 国家 : 48の国々 広域圏 : イギリス連邦 世界
	31	個人 : サリー（観光客）・シャーマ（インドに詳しい観光客）・自分 地域集団 : インド人・イギリス人 公人 : イギリス女王・パキスタン大統領 州・都市 : 広域地域 : 国家 : インド・イギリス 広域圏 : イギリス連邦 世界
単 元 8	32	個人 : 地域集団 : 黒人・Soweto・ズールー族・白人・Inkata 公人 : 州・都市 : 広域地域 : 白人政府 国家 : 南アフリカ共和国 広域圏 : アフリカ・ヨーロッパ 世界
	33	個人 : 地域集団 : 20万人の平和的デモ行進・白人・黒人 公人 : クラーク大統領 州・都市 : ケープタウン・ヨハネスブルク 広域地域 : 国家 : 南アフリカ共和国 広域圏 : アフリカ・ヨーロッパ 世界
	34	個人 : 自分 地域集団 : ロンドンクリケット協会 公人 : クリケット協会代表 州・都市 : ロンドン 広域地域 : 国家 : 南アフリカ共和国・イギリス 広域圏 : アフリカ・ヨーロッパ・ロンドンクリケット協会所属の国々 世界

(筆者作成)

ないものの、複数の国家をまたがってその事象が展開していることを示す。「世界」は記事の伝える事象が世界中に影響を及ぼし合い関係し合っている場合に記載している。表から、JPが掲載している記事が次の4つの特徴を持っていることが分かる。

第一は、一つの地域や国家の事象について伝える記事であっても、国家や行政区の枠組みを超える広い空間で影響を及ぼし合うことを示す点である。すべての単元で、広く世界から私的活動空間まで、世界中の人々から個人まで影響を与え合っている事象を取り上げた記事が用いられている。

例えば、単元3の記事は、イギリス国内の一地域の洪水の問題を取り上げているが、洪水対策

や復興に対する税金の投入を通じてイギリス国民全体の問題として報じている。加えて地球温暖化という地球規模の問題と、未来に向けて波及する問題についても報じている。

第二に、身近な地域から地球規模に至る様々な空間をまたがって活動する集団について伝える点である。すべての単元の記事で国家や行政区の枠組みを超えて活動する集団（インディアン・環境保護団体・移民・買い物客・イギリス国内を南へと移住する人など）が取り上げられている。例えば、単元2ではイギリス国内を北部から南部へ移動する人々が何を求め、何から逃れようとしているのかについての記事を通して、過疎化、過密化、格差、食糧の問題を理解させている。

第三に、地域や国をまたがる大きな空間での事象やその変化と問題点に関わる一個人に焦点をあてている点である。単元2～7は個人名詞を明示してその個人の捉え方を伝える記事、単元1は名前こそ明示しないが特定の個人の目から見た現状を伝える記事、単元8はイギリス国民一人一人の課題を伝える記事を採用している。地域社会、国家、国際社会という広い空間の事象を個人のレベルで捉えさせているのである。例えば、単元4ではEC（1989年当時）について、一つのショッピングセンターの店長を取り上げた記事を使って国境線を越えた交易や交流の増加の功罪を捉えさせている。ベルリンの壁の崩壊については、複数の高校生のインタビュー記事を使っている。

第四に、世界という大きな空間における事象であっても、他の国の事象であっても、イギリスに暮らす学習者に少なからず関係がある点である。すべての単元で、最初は自分とは無関係と思われる記事でも、学習を進めるうちに自分の暮らしと関係があることに気づける事象を扱う記事が採用されている。例えば、単元6では、地震の少ないイギリス人も絶対的に逃れることができない震災の被害の度合いが、自分の経済活動やイギリスの歴史的経緯によって左右されることに気づく。

#### 4. 教材の特質

##### (1) グローバル社会と自己の鏡としての記事

「1.」から「3.」に述べたように、JPでは、国内や国家の行政区を超える広域地域や広域圏に影響を及ぼし合う事象について、国家や行政区の枠組みを超えて活動する集団と、事象に関わり合う一個人に焦点をあてて報じる記事を掲載していた。これらの記事は、ローカルからグローバルなレベルのどの次元で起きた事象であっても、個人、地域社会、国家、国家共同体、世界に影響を与え合うことを伝えるもので、グローバル化した社会の様子を映し出す鏡といえる。加えて、どの記事もイギリスに暮らす学習者とその暮らしに大きく関係のあるものだった。どの事象も現在進行中で、経過を見守りより良い変化への寄与が必要だった。このような事象を報じる記事は、グローバル社会に生きている自分達を映し出す鏡だといえる。

##### (2) 情報操作としての記事

JPは公正さを保とうとする新聞から記事を採用しているが、一部には偏向性の高い記事があえて採用されている。それは、見出しのみの記事や出典先や発行年が不明な記事を多く扱っている単元に顕著に表れている。単元2・3・4では、「防波堤建設は税金の無駄」「陰気で恐ろしい壁」「南北危機」などセンセーショナルな誇張された表現のタイトル記事が目立つ。これらの単元では、見出しは公正さを保ちながらも、本文では特定の立場から見た事象の長所のみをとりあげる記事も含まれている。単元4のショッピングセンター建設の記事がそれである。



### (3) 送受信の場としての記事—収集・記事作成・投書—

単元1と単元8は【表4】に示したように学習者が収集した記事が教材となっている。これは、教室に掲示板を設け、学習テーマに関する記事、各記事を説明する見出し、短い説明文、掲載新聞、掲載年月日を貼り出す活動によって集められた記事である。

記事収集活動は、一般的に知られる通り、新聞を読めば今まで気づかなかった問題が起きること、その問題が世界各地はもちろん、自分の身近な地域でも起きていること、問題が自分と少なからず関係があることを学習者に気づかせるのに有効な活動である。JPは、この利点を取り入れるだけではなく、次の3つの点で、一歩進んだ記事収集活動を提案している。

第一に、単に記事を集めて掲示するだけではなく、いつ、どこで、争点は何か、などの基礎事実を端的に説明させる点である。いつ、どこでという記事を読む時の視点が得られるだけではなく、小見出しと1,2文で記事を説明するという制限によって、記事の伝える最も重要な情報は何かを絞りこんで読み取り表現する。これにより、学習者は、ローカルからグローバルな空間にまたがって複雑に絡み合う事象についての重要な情報を「正確に読み取る力」を身につけることができる。

第二に、記事の事象に関係する人、地域、国も説明させる点である。この視点で記事を読むことで、今まで記事を読んでも意識していなかった事象のグローバルなつながり、すなわち身近な問題も世界の問題もローカルからグローバルな空間を飛び越えて自分や様々な人、地域、国々に影響を及ぼしあうことに気づいていける。学習者は記事を「広い視野から読み取る力」を身につけられる。

第三に、上述の特色ある活動が単元1の導入部と単元8の終結部に配置され、JPの学習が記事探しに始まり記事探しに終わるという構成をとる点である。学習した社会のしくみについての見方・考え方を生かして多くの事象の中から同じしくみの事象を見つけ、問題意識を持ち続けて新聞を読み続ける、という記事を読んでグローバル社会を「見渡す力」を育てているといえよう。

これら3つの力が育めるように、記事収集の前には見本としての記事が掲載されている。

また、JPには実際に発行された新聞記事だけではなく、単元5・6以外の単元において児童が作る記事や紙面参加としての投書を教材として学習が展開されている。どれも記事が提起するグローバルな問題（開発か保護かという空間の異なる使用方法を巡る対立、防災、貿易やスポーツにおける国際間制裁）に関する解決行動とそれを吟味する内容の記事や投書となっており、次の2つの特色が指摘できる。

#### ア) 個人、市民、国民としての記事活用能力

JPではグローバルな問題に対する解決行動を起こすレベルが、一個人（単元1）、市（単元6）、国（単元8）と同心円的に拡大する構成を採用している。記事が提起するグローバルな問題は、戦争や植民地化という歴史的経緯や経済格差をもたらす経済システムが引き金となっている。学習者は記事を通して、自分の毎日の暮らしが歴史的経緯の上に成り立っていることや、消費行動がグローバルな問題を助長していることに気づき、問題解決の当事者としての自覚を抱くようになる。その自覚は、記事を使ってポスターや広告を作成したり、役割演技をしたりするという、問題解決行動の疑似体験を通して一層高まっていく。この時、個人、市、国のレベルでグローバルな問題の解決行動を疑似的に模索することで、「住民として、市民として、国民としての自覚と意思決定の材料として記事を活用する力」を高めることができる。



#### イ) 生活者としての行動指針の策定力

JP では住民, 市民, 国民という重層的なレベルでの解決行動を疑似体験するにとどまらない。必ずその行動を多面的に捉え直し, 公正か否かを判断する吟味の活動が用意されている。その吟味は, 一個人の視点から行うよう構成されている。これには, 次の二つの意図があるのではないだろうか。第一は, グローバルとローカルの価値や利益との葛藤の体験である。グローバルな問題には, 地球規模と個人や国との間で価値や利益の葛藤がつきものである。JP は問題解決行動に対して個人からの抗議の手紙や市議会の決定の過程や成果や公正さを評価する報告書を作成することで, この葛藤を学習者に体験させようとしている。葛藤を体験しなければ, 記事が示すグローバルな価値や利益を正義として強硬に主張しすぎ, 多様な人々の生活を脅かしかねない。グローバルな問題は, グローバルとローカルな価値の調整を図り, 生活者の視点から解決策を考える必要がある。

第二は, 生活者としての行動指針を考える体験である。グローバルな問題に対して住民, 市民, 国民というどのレベルで解決を図ろうとも, 実際に行動していく主体は今, ここに暮らしている自分という生活者である。生活者の視点で解決行動を考えなければ, その行動が現実離れたものになったり, 問題を人事のように捉えて解決の主体であるという自覚がもてなかったりする。

#### 5. 能動的, 重層的な社会形成者としての記事活用能力

学習活動Cでは, ポスター・広告・抗議の手紙・報告書の作成, 市議会への提言, 資料読解, 話し合いという問題解決行動を疑似体験させていた。これらは, 民主主義を担う自立した市民に求められる<sup>4)</sup> 能動的に社会を形成する手段であり, 投票のように制度として与えられた手段による社会形成行動ではない。この手段の行使には次のような記事活用能力が必要となる。ポスターと手紙の作成では, 当事者の意向を無視した改善策や協力行動を押しつけて新たな対立を生まないよう, 記事が提起する問題を多様な立場から理解し, グローバルとローカルな価値を調整する力。広告や市議会への提言では, 記事から問題の原因や解決策の方向性を分析する力。資料読解や話し合いでは記事とそれを補う多面的な情報や他者の考えを取り入れた上で判断する力である。JP はこのような記事活用能力を育成することで「能動的に社会形成に寄与する力」を育もうとしている。

また, 住民, 市民, 国民の各レベルでグローバルな問題を判断, 意思決定, 行動するという単元の構成は, ローカルからグローバルのどのレベルでも「重層的に社会形成に寄与する力」を育成するのに役立つ。さらに, 個人の視点から問題解決行動を吟味する学習活動は, グローバルな問題を解決する主体者, 生活者として, グローバルとローカルな価値の葛藤を調整し, いつ, 何をどのようにすればよいのかという現実的な行動指針を立てる力を育んでいる。

### Ⅲ. 目標原理としてのグローバルシティズンシップ

なぜ, グローバルな社会と自己を映し出す記事を JP は選んでいるのだろうか。JP の編者は次のように述べている。

4) 山田竜作・藤原孝編『シティズンシップ論の射程』日本経済評論社 p. 283.

「社会的、政治的、経済的問題のうち、典型的かつ多くの11歳から12歳の若い世代の興味関心を強く惹きつけている問題を真剣に、詳細に、正確に映し出すことに力を注いだ。」<sup>5)</sup> また、ナショナルカリキュラムが11歳から12歳において地域や国家を強調するのに対し、JPは『活動空間』には柔軟に変化する境界線があるという考え方で貫かれているが、(単元1に見られるように)それはローカリティ(郷土意識)の育成にも役立つ。<sup>6)</sup>

JPの主張はこうである。人、物、事象、問題が国家の枠組みを超えるグローバル社会においては必然的に国家の存在が揺らぐ。それに対応して地域や国家を全面に押し出し愛国心の育成を強調するのではなく、地域や国家の枠組みを超える広い視野に立つ空間認識こそが、国家や地域への帰属意識を高めることにつながる。だから、JPは「国民」ではなく、地域や国家の枠組みを超えた空間に暮らす「生活者としての市民」を育成する。

例として挙げられている単元1の学習を見ると、「宇宙の中の、太陽系の、地球のヨーロッパの中の…略…学校の教室の、窓際にいる自分」などと国家を超える広い視野から自分の居場所を捉えさせている。自分が学び、遊び、暮らす空間を分けたり、特徴づけたりする境界線として、地域や国家という行政によるものだけではなく、地形、農業、文化、格差、戦争、差別、対立、連帯などの自然的、経済的、政治的、文化的、歴史的、社会的、心理的要因によるものも取り上げている。境界線によって分けられている「活動空間」については、自分、家族や友人、身近な地域の人々、ハドリアンの壁にまつわる人々、アフリカをめぐる対立と連携を深める各国の人々、エチオピアとイギリスの人々などを調査し、境界線が新たに作られたり、変化したりすることで、活動空間の特色も、空間同士の人や事象等のつながり方も、自分の暮らしぶりも変化することを学ばせている。

また、グローバルな社会的事象にもかかわらず学習者が自己投影できる個人に焦点をあてた記事を採用しているのには、次のような考えが根底にあると考えられる。

「目の前にいる具体的な『ひとり』、現実には生きている『ひとり』といかに向き合うかが、地球時代の『市民性』として問われているのではない。文化や民族、あるいはイデオロギーといった属性でのみ人間を見るのではなく、相互に異質な個人の中に内在する『生命』そのものの普遍性を明らかに見ていく。その上で、その個々の人間に固有の息遣い・痛み・嘆き・苦悩、等々に対して(沈黙にさえも)耳を傾けていく。そして、『闘い』としての対話を通じて、相互に『共通の事柄』について関わり合っていく。こうした市民性こそ、非暴力的な『アゴーンの政治』に要請されるグローバル・シティズンシップではないか。」<sup>7)</sup>

なぜ、JPはグローバルシティズンシップとして「広い視野にたつ生活者」としての資質を身につけさせようとするのだろうか。

JPは、記事を読んで、社会を知ったつもりになって、多くの「うんちく」を語るだけの物知り博士を育てようとしたのではない。偏向性の高い記事を採用して、学習者に情報操作に一度は惑わされそれを批判的に捉え直す機会を用意することで冷静に記事を読み判断できる市民を育成しようとしたことは間違いない。が、単に記事を批判的に読み、情報操作やコマーシャル戦略のわなにはまらない市民を育成しようとしたのではない。

JPは、記事を読んで、記事の向こう側に暮らす声なき人々に心を痛め、鋭い目で社会の問題や

5) David Lambert "Jigsaw Pieces" Cambridge, 1992, p. 5.

6) Ibid. p. 2.

7) 同掲書 3) p. 283.

不条理さを見抜き、柔軟で創造力豊かな発想によって、より良いに社会に向けて喜んで力を差し伸べる「Cool heads but Warm Hearts（冷静な頭脳だけでなく温かい心情）」をもった社会形成者を育成しようとしている。

「冷静な頭脳だけでなく温かい心情」とは、イギリスの経済学者アルフレッド・マーシャルの言葉である。彼は、JPを製作したケンブリッジ大学に就任した際に次のように述べている。

「周囲の社会的苦難に取り組むために、冷静な頭脳をもって、しかし温かい心情をもって進んで力を差し出す者をケンブリッジで学ぶ人々の中から、より多数送り出せるよう、微力ながら全力を尽くすことが私の志である」<sup>8)</sup>

彼は、自らの理論的發展を貧困問題の克服に役立て、ケンブリッジ学派を築いた。JPは当時のケンブリッジ大学教授 David Lambert らがケンブリッジ地理プロジェクトとして開発した教科書である。マーシャルの精神はケンブリッジ大学に脈々と受け継がれ、シティズンシップ論で有名な T. H. マーシャルだけではなく、イギリスからはるか離れた日本でも経済学を学ぶ者を中心に語り継がれている。アルフレッドと直接面識がない JP の製作チームにも影響を与えていると考えられる。

JP は、国家の枠組みにとらわれない広い視野にたった個人、地域、国家、世界についての冷静な認識を育むと共に、様々な空間にまたがって影響を及ぼし合う温かな生活者としてイギリスのこの地域に暮らす自分という認識を育もうとしている。

## VI. おわりに ―いつでもどこでも冷静なグローバルシティズンシップの形成―

「冷静な頭脳と温かい心情」をもった社会形成者の育成は、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者」をうたうわが国の小学校社会科に大きな示唆を与えるものといえる。また、わが国の社会科は同心円の拡大法の原理から脱却できず、ローカルな空間で起きている事象でもグローバルな空間と相互作用し合っている現実の社会に対応できないでいた。その点、JP のようなグローバルな社会と自己を映し出す鏡としての記事を採用することで、「ローカル＝グローバル」という重層的な事象の捉え方を学習者に提供することが可能となる。それだけではなく、次の2点において、優れていると評価できる。

第1は、「国民」ではなく、「グローバル市民」を育成する点である。JP は、生活者である児童一人ひとりが、それぞれの場所で、それぞれに生き生きと暮らすことが社会をよりよくしていくことにつながるという発想で「冷静な頭脳と温かい心情」を育んでいる。世界のシティズンシップ教育の中で、わが国は国家ありきの「国民」（愛国主義者）育成に傾いていると位置づけられる<sup>9)</sup>。シティズンシップ論の展開において、近年、生活者の視点の重要性が叫ばれている中、JP は先駆的に生活者の視点を組み込んだ教材選択をしている点で評価できる。

第2は、第1に指摘した目標原理に基づいて、「広い視野に立つ生活者としての自覚」を育む記事を教材として用いていた。JP の教材選定の視点を参考にすれば、学校教育の現場の教師が、地域や子どもの実態に応じて新聞教材を自ら選択することが可能となる。

8) 林 敏彦「マーシャル『経済学原理』」日経新聞朝刊 2007

9) 同掲書3) pp. 247-285.

## 引 用 文 献

林 敏彦「マーシャル『経済学原理』」日経新聞朝刊, 2007

山田竜作・藤原 孝編『シティズンシップ論の射程』日本経済評論社, 2010

David Lambert, “Jigsaw Pieces” Cambridge, 1992

David Lambert, “Cambridge Geography Project Jigsaw Pieces Teacher’s Resources”, Cambridge, 1992

拙稿「グローバルに考えローカルに行動する資質を培う社会科学習方法論—ケンブリッジ地理プロジェクトの単元『端で暮らす』の分析を手がかりに—」全国社会科教育学『社会科研究』第70号, 2009

〔2011. 9. 29 受理〕